



HAGS・HABA 社
日本総代理店



株式会社 アネビー

E-Mail: aneby@aneby.co.jp
WEB: www.aneby.co.jp

本 社 〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町33-8 元代々木サンサンビル5F
Tel: 03-3465-4828 Fax: 03-3465-7781

大阪支社 〒564-0063 大阪府吹田市江坂町1-12-28 大昇ビル702
Tel: 06-6836-7368 Fax: 03-3465-7781



Ett barn

- 1 Ett barn som kritiseras
lär sig att fördöma.
- 2 Ett barn som får stryk
lär sig att slåss.
- 3 Ett barn som hånas
lär sig blyghet.
- 4 Ett barn som utsätts för ironi
får dåligt samvete.
- 5 Men ett barn som får uppmuntran
lär sig förtroende.
- 6 Ett barn som möts med tolerans
lär sig tålamod.
- 7 Ett barn som får beröm
lär sig uppskatta.
- 8 Ett barn som får uppleva rent spel
lär sig rättvisa.
- 9 Ett barn som får känna vänskap
lär sig vänlighet.
- 10 Ett barn som får uppleva trygghet
lär sig tilltro.
- 11 Ett barn som blir omtyckt och kramat
lär sig att känna kärlek i världen.

BRIS
BARNENS RÄTT I SAMHÄLLET

- 1 非難された子どもは偏見をもつ。
- 2 叩かれた子どもは乱暴になる。
- 3 あざけられた子どもは引っ込み思案になり、
- 4 皮肉ばかり言われる子どもは、良心の呵責にさいなまれる。
- 5 しかし、励まされる子どもは信頼することを学び、
- 6 寛容さに出会う子どもは忍耐力を学ぶ。
- 7 ほめられる子どもは喜びを学び、
- 8 公平さを経験した子どもはフェアプレー精神を学ぶ。
- 9 友情を感じる子どもは親切さを学び、
- 10 平安を知る子どもは、人を信用することを学ぶ。
- 11 そして、愛され抱擁される子どもは世界に愛があることを学ぶ。

出典

「スウェーデンののびのび教育」
著者 河本佳子 氏
発行 株式会社新評論

子どもの将来の運動や学習に大きくかかわる5つの感覚

人間の基本的な感覚をあらわす誰もが知っている『五感』とは、「視覚」・「聴覚」・「触覚」・「味覚」・「嗅覚」です。

味覚・嗅覚はからだの筋肉形成と神経回路の促通に必要な栄養を取り入れる基礎となりますが、子ども達が成長していく上で、運動や学習に大きくかかわっている必要不可欠な感覚とは「視覚」・「聴覚」・「触覚」に「前庭覚」と「固有覚」の2つを加えた『新五感』です。

またこの『新五感』がそろい、それぞれの感覚が協応し、統合されていくことが、その子どもの将来を形づくるために非常に重要であるとアネビーは考えています。



基本的な五感

聴覚

ある範囲の周波数の音波を感じて、音の強弱や高低、音色、リズム、言語を把握する

触覚

皮膚に接触した時に感じる感覚。刺激の強さや種類、温度を把握し、感度はマイクロレベル

前庭覚

重力に対しての加速や回転、傾き、揺れなどの自分の体勢を認知できる感覚

視覚

光の明暗や色に関する感覚。また形や大きさ、高さ、奥行き、動きなど把握する

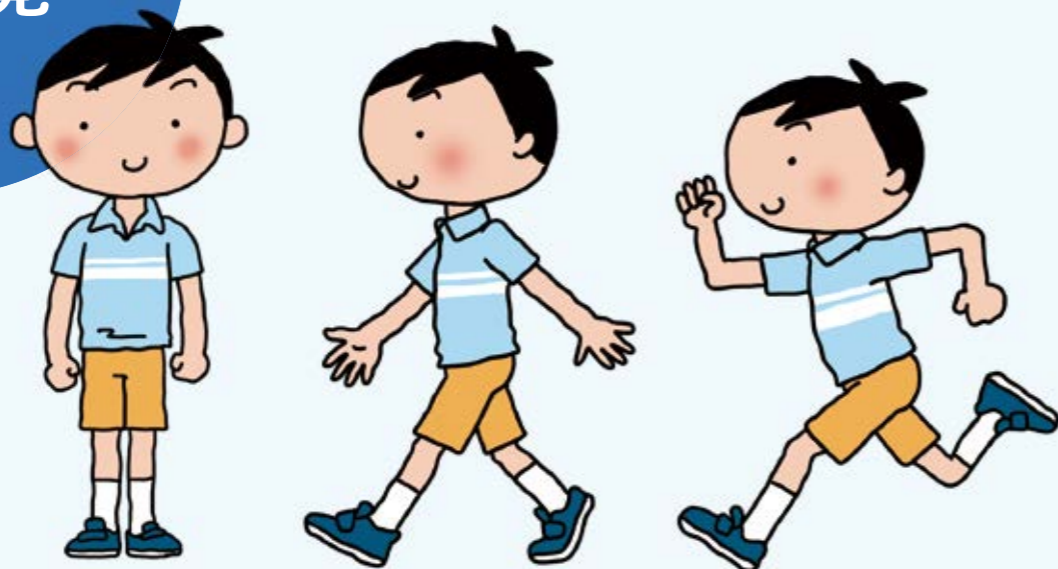
固有覚

手足やからだの位置関係を把握し、力の入れ具合と滑らかな動きを可能にする感覚



それでは子どもの成長に大きな影響をもつ『新五感』の中でも重要な役割をもつ2つの要素「前庭覚」と「固有覚」をもう少し詳しく説明していきましょう。

ぜんていかく 前庭覚



からだの傾きや揺れ、スピード、バランスなど、重力に対する自分の体勢を自動的に認知できる感覚。耳石器と三半規管のセンサーで感じる。また覚醒の調整や眼球運動を助ける働きもある。

姿勢よく座ったり、立ったり、転ばないで走るなど、自分自身のからの機能を把握し、挑戦への意欲の礎となる。

この感覚に
不具合があると?

鈍感

- ・姿勢が崩れる
- ・むやみに走り回る
- ・危険を顧みず高いところへ上りたがる

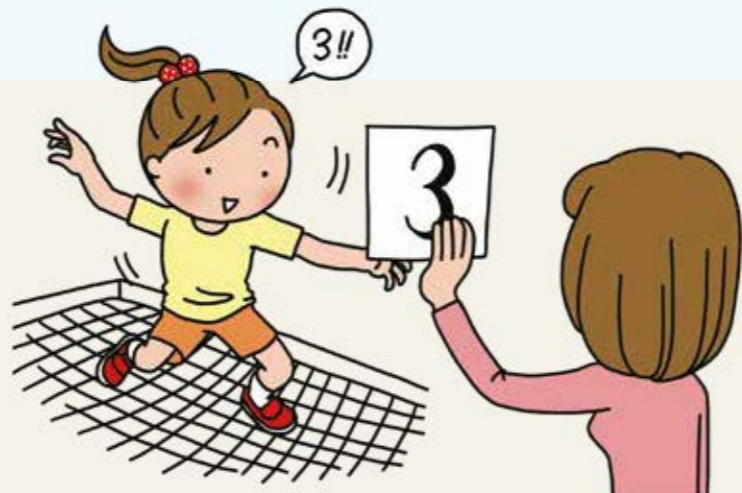


敏感

- ・ブランコやトランポリンが不得意
- ・プールを怖がる
- ・乗り物に酔いやすい

効果的な動き

ブランコやトランポリンで揺れや重力を感じる遊びを楽しむ。さらに同時に、的当て数字当てで目の動きのコントロールに刺激を与えることで「前庭覚」への発達を促す効果が高くなります。



こゆうかく 固有覚



手足やからだ全体の位置や動きを立体視し、ボディイメージによる滑らかな動きを可能にする感覚。

筋肉を使う時や関節の曲げ伸ばしによって生じる。また力の入れ具合を感じ、物の重さなどの情報を脳に伝える働きもある。運動におけるバランスやスピードの制御によって相手の動きを真似することができたり、情緒を安定させることもできる。



この感覚に
不具合があると?

- ・衣服の着脱が苦手
- ・積み木を組み立てるのが難しい
- ・手遊びや折り紙が不得意
- ・縄跳びやマット運動が上手くできない
- ・お遊戯ができなくて、他の子と同じポーズを決められない
- ・球技が下手



効果的な動き

クライミングで高いところへ手を伸ばしてよじ登ったり、砂を入れた器を持ち上げて運ぶなど、自分のからだの状態を把握することで「固有覚」への効果が高くなります。



この2つの感覚は子どもの将来の運動や学習、その他のさまざまな成長に、もっとも大きくかかわっている感覚なのです。

子どもは感覚の発達と発達した感覚の相互作用で成長する

定型発達の子どもの、月齢による発達の段階はありますが、この5つの感覚がバランスよく育っていくため、その後も、遊びや生活の中で、さまざまな体験やからだの動きを経験していくことで、上の段階へと順調に成長していきます。

例えば感覚器そのものは、からだの成長とともに育っていきます。しかし、本来の感覚器として活動を始めるためには、それらが脳でつながっていくことが必要です。

いろいろな物を見たり、聞いたり、触ったり、さまざまなからだの動きをすることで、感覚器はいろいろな情報

を吸収します。その情報が脳で適切に処理され、さらに、違う感覚器から吸収された情報と交じり合い「相互作用」が始まります。

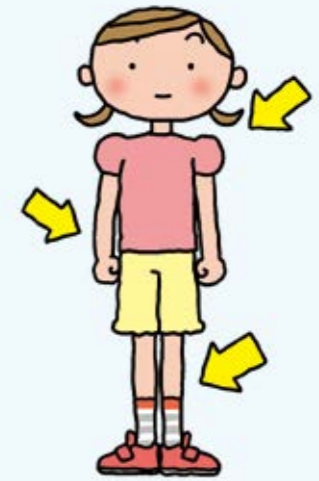
その「相互作用」のことを『感覚統合』といいます。つまり、『感覚統合』とは「視覚」・「聴覚」・「触覚」・「前庭覚」・「固有覚」の感覚同士が相互にうまく作用しあうことでバランスよく発達し、その後の発達に大きく影響していくと考えられています。

その成長の「相互作用」をイメージしたのが下記の図です。



※最初はそれぞれ単独で発達。それが相互に結びついていくことで、より複雑なからだのコントロールへと発達していきます。基本的には下の段の項目のすべてを獲得すると、「相互作用」により、上の段のことができるようになって考えられています。

そんな「相互作用=感覚統合」がスムーズにできるようになると、木から落ちそうになれば、木をしっかり握るようになりますし、走って転びそうになると速度を落とし適応する能力を身につけるのです。そして子どものからだの筋肉という筋肉、関節という関節、あらゆるからだの感覚を研ぎ澄まし成長していけるのです。



そんな「感覚統合」を身につけるため子どもは危険だと知っていても、木登りや坂道を走って降りる

一方で感覚の発達に偏りがある子どもがいます。

それはももとの「障がい」で「子どもの将来の運動や学習に大きく関わる5つの感覚」のひとつ、またはいくつか欠けていて「相互作用=感覚統合」が正常に育たず、上の段階に行けないことがあります。また感覚器は正常でも育ってきた環境や、たまたまその感覚を発達させる「体験」が乏しかったことに原因があるのかもしれませんが。

例えば「お友だちに乱暴する」のはその子が悪いのではなく、もしかしたら「固有覚」や「触覚」が鈍感なために、お友だちにはどのくらいのかで接していいのかが、分からないのかもしれませんが。もしそうであるならば、その子への指導は「お友だちに乱暴するのはダメ」と言うのではなく、「固有覚」や「触覚」の発達に直接、働きかける活動を重点的に行なうことや、それを補完するための訓練をす

ることが重要となるのです。

つまり発達障がいの子どもの発達に対して、どうすることが効果的なのでしょう？

それは欠けたり、尖ったりしている部分を否定したり、そのままにしておくのではなく、あらゆる経験や刺激が体験できる要素を豊富に取り入れた「遊び環境」を整えること。そして日常生活にはない、またぐ、くぐる、よじ登るなどの新しい動きを体験させることで、特に発達に重要な役割をもつ「前庭覚」と「固有覚」を育てたり、また補完できる「きっかけ」をつくること。それも脳の神経系ができてあがる6歳までの早い時期に「遊び」での経験をたくさん積むことで、よりその効果があると考えられているのです。

作業療法士の 子どもを見る視点

最初に「作業療法士」とは、どんな役割を指しているのか明確化していきます。

人はみな、毎日、「作業」をしています。

「作業」とは人の日常生活にかかわるすべての諸活動のことです。例えば、食事や着替え、トイレなどのセルフケアをはじめ、家事や仕事、学習や余暇などの行為すべてを指します。そして子どもにとっての作業は「遊び」のことです。ところが病気やケガで、または生まれながらに障がいがあったり、年齢によって支援を必要とすることがあっても、「その人らしい」生活を得ることが必要であり、その人達を含めたすべての人の活動によって「社会」がつけられるのです。

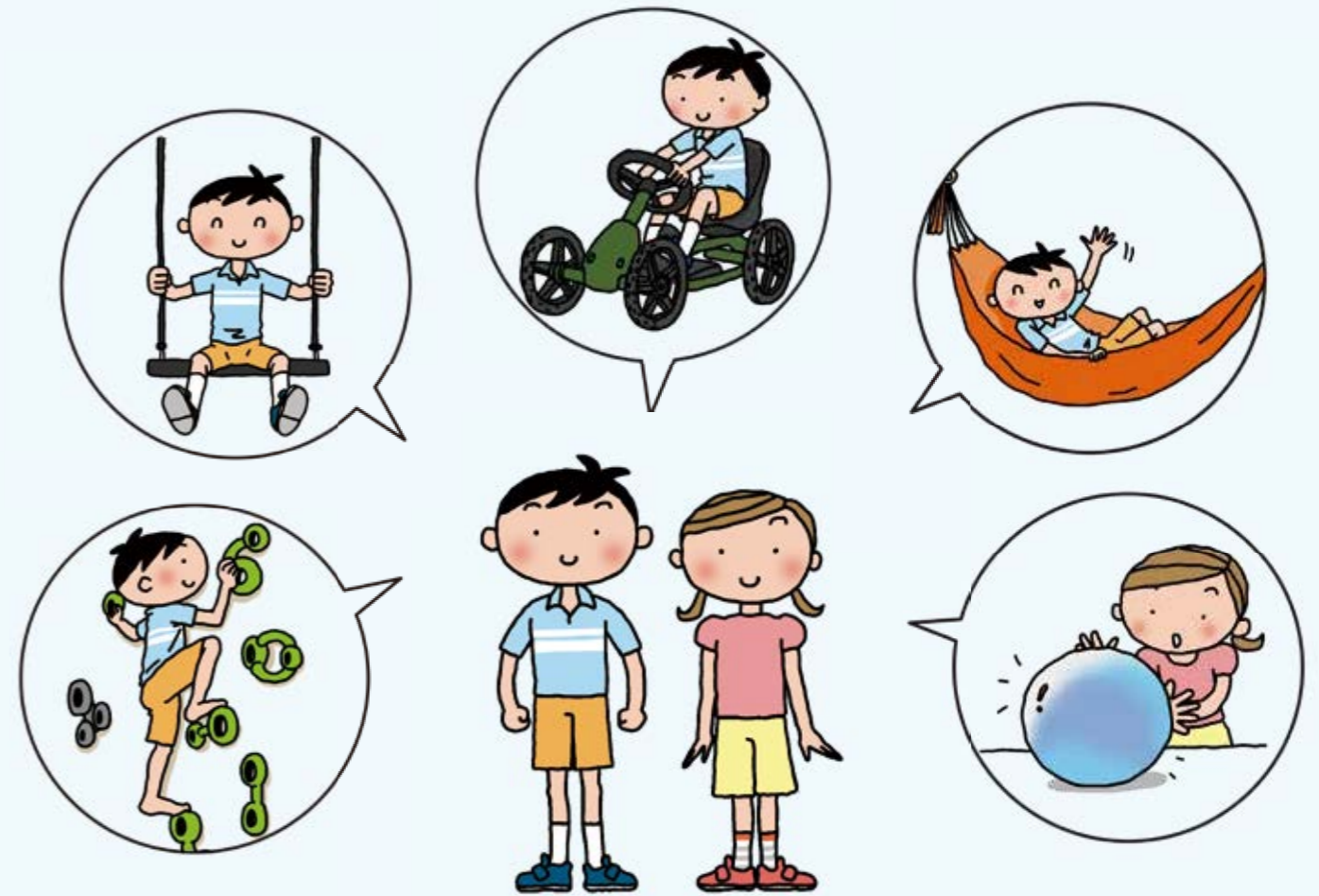
そんなすべての人の「作業」を維持し、改善し、その人らしい日常生活がスムーズに行われるように、援助・指導・訓練をするのが『作業療法士』です。

ところで『作業療法士』は子ども達のどんなところを見て、指導していくのでしょうか？

ほとんどの子どもは、人間が本来持つべき基本的な能力を身につけて生まれ、日常生活からあらゆることを自然な形で吸収し、学習を重ねて成長してゆく能力をもっています。しかし発達障がい児にはその工程がとても困難になります。なぜなら欠けている感覚器官やそれらを統合するバランス感覚を正すためには、言葉による指導には効果が無いからです。では何が最も有効なのでしょう？

それはさまざまな「体験」ができる「環境」を子ども達に与えることです。それもできるだけ早く、そして欠けたり、劣ったりしている部分だけ修正するようなものではなく、あらゆる経験や刺激を豊富に取り入れた「遊び環境」だと私たちは考えています。

私たちはそんな発達に欠かせない「遊び環境」における遊具ごとの効果を、作業療法士の視点から解説していきたいと思います。



スウェーデンの作業療法士

スウェーデンでは、障がいをもつ人が不自由なく日常生活がおくれるように環境を整え、適応能力を引き出す訓練をし、快適な生活が可能になるように、あらゆる角度からさまざまな問題と対策を見つけようとするのが、作業療法士の課題であり、任務です。

療法士について、スウェーデンでは4種類に分かれています。

作業療法士

日常生活がスムーズに行われるように援助、指導、訓練をする

言語療法士

発語が遅れている状態が改善されるよう言語指導をする

理学療法士

身体的要因を分析して運動維持できるように指導訓練をする

心理療法士

子どもの発育や知能検査、特別学校への入学や家族への心理相談を受ける

特に作業療法士は、障がい者の不足している部分だけを見るのではなく、残存能力を強め、楽しい生活空間になるように臨機応変に対処し、ともに喜びを発見していく仕事なのです。

さらに他の専門職として医療チームには脳神経専門の医師、一般的な看護を担う看護師、リラクゼーションを行うマッサージ師、患者の経済的相談や助言をする医療ソーシャルワーカーや医療事務があり、教育的サポートには特別養護教育を学んだ教員や、演劇や寸劇を通して自己表現や他人の気持ちを理解できるよう指導するドラマ教育者、地域のクラブへ障がい者の受け入れを呼びかける余暇コンサルタントなど、さまざまな専門職が障がい者一人ひとりを支えています。

これらの人達と作業療法士は常に協力し、さらに専門性を発揮し、障がい者達を社会参加できるようにと導いているのです。

河本佳子著 「スウェーデンの作業療法士」2000年2月15日 新評論 発行 よりまとめ